



Title	カール・シュミットと脱政治化の問題
Author(s)	内藤, 正博
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2025, 58, p. 35-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100948
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

カール・シュミットと脱政治化の問題

内藤 正博

キーワード：カール・シュミット／脱政治化／自由主義／ロマン主義

1. 序

ユルゲン・ハーバーマスは、1968年に行われた *Zeit* 誌のアンケートに対する回答である「我々は正しく知らされているのか」の中で、「公共圏の脱政治化 (Entpolitisierung der Öffentlichkeit)」(Habermas [1981a] S. 245) を問題視している。彼によれば、公共圏は「マスメディアが国民の意識を私的な事柄と個人的関係に結びつけ、公共の関心を代理人たちによる同調可能な抗争へと誘導する」(ebd.) こと、そして公共的議論に関わる「個々人の関心が [...] 金と時間からなる抽象的単位において測られ、そのようなものとしては「非実用的」である」(ebd. S. 246) とされることが、脱政治化の要因に数え入れられる。近年でも (1990年代以降)、英語圏の政治学において、「政治化 (politicization)」および「脱政治化 (depoliticization)」が盛んに議論されてきた (cf. ポープ [2021])。イギリスの政治学者であるコリン・ヘイのモデルによれば、脱政治化とは、政府領域・公的領域・私的領域・必要性 (非政治) の領域という諸領域において、ある争点がより非政治的な領域へと移行する現象を指す (cf. Hay [2007] pp. 78–87)。

本稿では、1920年代前後におけるカール・シュミット (1888–1985) の脱政治化論を参照し、その特徴を明らかにする。彼の脱政治化論の特異性は、あらゆる領域が政治化する可能性を持つと考えられている点にある。このアイデアは、我々が今現在も何かしらの対象を、政治的でないものとして、つ

まり脱政治化されたものとして前提としている可能性を示唆する。つまり、自明でありかつ我々が変更することのできない「自然」なものとして諸学問が前提としている事柄が、実は政治的に機能しているという事態が考えられるのである。

また、シュミット研究の観点から見ても、彼の「友敵理論」や「例外状態」、「決断」といった周知のキーワードから諸著作を読解する研究は盛んに行われてきたが、「中立化と脱政治化の時代」と題された著作があるにもかかわらず、また主著の中でも度々問題とされているにもかかわらず、「脱政治化」を中心に据えて読み解く研究はほとんど見当たらない。本稿は、シュミットによる自由主義批判とロマン主義批判を、脱政治化という一貫したテーマの下で読むことができるということを示すものである。

2. 議会主義批判への予備的考察としての脱政治化論

1920年代から1933年まで（いわゆるヴァイマル時代）におけるシュミットの理論的作業は、議会制度への批判に集中している。なぜなら、ヴァイマル議会という制度を実質的に解体し、大統領に強力な権限を与えることによって、第一次大戦後という「例外状態」を克服する必要があったからである。この時期の一連の著作では、独裁の歴史的正当性、民主主義的正統性、そして（ヴァイマル憲法第48条解釈による）独裁の法的根拠づけなどといった議論が展開されている。また一方でシュミットは、議会主義に対する批判を展開することによって、議会制に対する独裁の優位を主張する必要があった。その中で提出された論点の一つが、「脱政治化」である。さらに注目すべきことに、シュミットはその現象を歴史哲学的とも受け取れる方法によっても分析した。本節では、彼の脱政治化論を再構成することによって、議会主義批判の見取り図を明らかにする。

(a) 中心領域と中立化

シュミットは、1929年の講演「中立化の中間段階にあるヨーロッパ文化 (Die europäische Kultur im Zwischenstadium der Neutralisierung)」をもとにした論文「中立化と脱政治化の時代 (Das Zeitalter der Neutralisierungen und Entpolitisierung)」¹⁾において、ヨーロッパ知識人の過去400年間にわたる精神活動を、世紀毎に「中心領域 (das Zentralgebiet)」が転移してゆく過程として捉えている。16世紀においては神学的なもの (das Theologische) が中心領域であったのに対して、17世紀は形而上学的なもの (das Metaphysische) が、18世紀は人道的・道徳的なもの (das Humanitär-Moralische) が、19世紀は経済的なもの (das Ökonomische) が中心領域であった (ZNE, S. 81)。シュミットによれば、(神学的) 16世紀から (形而上学的) 17世紀への移行が「明確かつ特に明白」(ZNE, S. 82) であるという。その転回は、合理主義への移行を意味しており、以後の方向を多分に規定している。17世紀においては、大きな形而上学的体系のうちにあらゆる合理的 (科学的) 認識が組み込まれていた。²⁾ 18世紀においては、理神論哲学によって形而上学が後退し、啓蒙という世俗化によって前世紀から引き継がれた合理化が一層推し進められた。続く19世紀は、「美的・ロマン主義的傾向と経済的・技術的傾向とが一見混然として不可能であるかのように結びついた1世紀」(ZNE, S. 83) である。とはいえシュミットによれば、美的なものを中心としたロマン主義は瑣末なものであって、単に経済的なものを準備した過渡期に過ぎない。マルクス主義に代表されるように、19世紀の真の中心領域は「経済的なもの」なのである。

シュミットが言う中心領域とは、「人間が自らの現存在の中心を見出す」(ZNE, S. 80) 領域である。ヨーロッパにおけるエリートの思考は、その時代の中心領域をめぐって展開されてきた。その中心領域が移行すれば、他の領域の問題はその中心領域から捉え返され、中心領域の副産物として考えられ、それらの解決はあくまでも「付随的になる」(ZNE, S. 85)。例えば18世紀においては全てが道徳的教育の問題となり、19世紀においては全てが経

済的問題（財貨の生産と分配）になるといったように、各時代の中心領域から問題が捉え直されてきたのである（ZNE, S. 85f.）。とはいえ、ある時代の中心領域があらゆる事柄を包摂しているわけではないし、中心領域でない領域が無かったことにされるわけでもない。諸領域は相互に絡まりあいながら、常に併存し続けるのである。

なぜ中心領域は一つに安定せず、転移し続けてきたのだろうか。ヨーロッパ人は、神学的議論が限りない論争を生むだけのものとなったことをきっかけとして、中心領域を神学から形而上学へと展開させた。すなわち、「抗争が解消するような領域、つまり人々が相互に了解し、合意し、互いに納得できるような領域」（ZNE, S. 88）である「中立領域」を追求し始めた。17世紀以降、中心領域の追求は同時に中立領域の追求となったのである。シュミットは、これが「過去数世紀のヨーロッパ史にとって特徴的な精神的中立主義」（ZNE, S. 87）であるとする。

しかし、当初は中立的だと考えられていた領域も、「係争領域（Streitgebiet）」に転化してしまう。その結果として中心領域が別の領域へと移行することになるのだが、その際に逆説的な現象が生じる。

しかしやはり本質的なことは、従来を中心領域すなわち神学が係争領域であるために捨てられること、そして別の中立領域が探求されることに存すると私には思われる。従来を中心領域は、それが中心領域であることを止めることによって中立化される。[...] 中心領域の転移によって常に新たな闘争領域（Kampfgebiet）が生まれるということが、そのような発展の弁証法に属する。[...] ヨーロッパの人間は絶えず一つの闘争領域から中立的領域へと移行し、また新たに獲得された中立的領域は絶えず即座に再び闘争領域になり、新たな中立的領域を探求することが必要となるのである。（ZNE, S. 88f.）

(b) 中立化と脱政治化

そして、中立化は同時に「脱政治化 (Entpolitisierung)」でもある。中立化とは対立が解消されている事態を指すのであって、それは換言すれば「友敵関係」が存在しない状態を意味するが、『政治的なものの概念』で展開されるように、シュミットにおいては「友と敵 (Freund und Feind) の区別」(BP, S. 26、強調原文)こそが「政治的なもの」の徴標だからである。そして、「友と敵という概念は、その具体的で実存的 (existenziell)³⁾ な意味において受け取られるべきである [...]」(BP, S. 28)。つまり、「敵の概念には、現実の領域における闘争の偶発性が含まれる [...]」(BP, S. 33)。あらゆる(道徳的・宗教的・経済的などの)対立が戦争にまでエスカレートする可能性が高まれば高まるほど、それは政治的な対立となってゆくのである。「政治的なもの」は、(1927年の時点で説明されていたように)「独自の専門領域 (Sachgebiet)」ではなく、「人間の連合あるいは離散の強度 (Intensitätsgrad) のみを示す」(BP, S. 38)。

さらにシュミットは、政治的なものが可能性として常に遍く存在するということ、いわばそれが「宿命」(BP, S. 77)であることを強調する。「いかなるものも、政治的なもの[戦争の現実的可能性という]この帰結を免れることはできない」(BP, S. 37)。そして、「政治的なものは、その力を人間生活のあらゆる領域、つまり宗教的、経済的、道徳的またはその他の諸対立から引き出すことができる」(BP, S. 38)。

以上から明らかであるように、シュミットにとって中立性を求めることは脱政治化することであって、友・敵という対立を隠蔽すること、あるいは対立そのものを追放することを意味するのである。シュワープいわく、「彼が暗示したのは、常に新たな領域へと逃げ込むことによって友・敵カテゴリーが消滅しようとするのは誤りだということであった」(Schwab [1989] p. 75)。

(c) 中立化=脱政治化の二重性

シュミットが把握する中心領域の中立化=脱政治化について、その「弁証

法」に基づいて2つの事柄を指摘することができる。すなわち第一には、中心領域は「中立的」であると考えられることによって中心領域たりうるということ、第二には、当該領域が係争（闘争）領域に転化し、中心領域が異なる領域に求められた後に、かつての中心領域は「真に」中立化されるということである。

シュミット自身この「弁証法」を指摘しながらも、中立性に関わる上記の差異をとりわけて強調しておらず、（それは「シュミットにしばしば見られるように、戦略的曖昧さを露呈している」（Goupy [2018] p. 404）一場面であるとも考えられるが）二つを無差別に「中立化＝脱政治化」概念に回収して扱っている（そして後に見るように、これは議会主義批判において一層明瞭となる）。確かに、脱政治化を批判し、中立的とされる領域を政治化することによって政治的なものを復権するという目的の下においては、二つの差異は問題にならないだろう。しかし両者はそれ自体、質的に異なるものとして考えられるべきである。すなわち、第一の意味における中立化は、対立が生じないものとして無媒介に想定されることによって、その領域が中立化されることを意味する。つまり、新たな領域であれば対立は起こらないであろうという期待によって中立化される。それに対して、第二の意味における中立化は、対立が生じたがゆえに廃棄されるということを媒介として、その領域が中立化されることを意味する。つまり、当該領域が、もはやそれを中心領域として扱っても意味のないもの、争点たる意義のないものと見なされることによってなされるのである。

さらに、以上の二つの中立化を、「脱政治化」というタームに引きつけて再検討すると、次のようになるだろう。

第一の意味の中立化から帰結する脱政治化（以下、「第一の脱政治化」）は、対立が本来的に成立するはずの対象をめぐる対立可能性を回避しようとする、あるいはかき消そうとする試みである。しかしこの時、実質的に対立可能性が消滅するわけではない。中立領域が闘争領域へと転化することから分かるように、問題の対象はそれ自体としては対立可能性を保存している。

後に見るように、「公開の討論」という自由主義的観念によって、本来「敵」であるはずの存在者が単なる「論争相手」になっているとシュミットが批判する時、彼はこの意味での「脱政治化」を問題視していると考えられる。

それに対して第二の意味の中立化から帰結する脱政治化（以下、「第二の脱政治化」）は、対象を巡る政治的対立がそもそも起こり得ないと考えることである。問題の対象は、神的なものや自然的なもの、美的なものといった、政治的対立が殆ど起こることのない領域へと帰属させられる場合に、脱政治化される。後に見るように、ロマン主義者が国家や政府を含むあらゆる政治的現実を「オッカジオ」と見做し、単なる気分の「きっかけ」として扱う事態をシュミットが批判する時、彼はこの意味での「脱政治化」を問題視していると考えられる⁴⁾。

3. 自由主義とロマン主義

前節では、シュミットが把握する「中立化プロセス」から、「脱政治化」の二類型が見出された。以下では、この二つを導きとして、自由主義批判 (a) だけでなく、ロマン主義批判 (b) もシュミットの「脱政治化批判」として読解されるという可能性を示したい。つまり、ヴァイマル体制下において大統領の独裁を正当化するという作業の一環として遂行されるシュミットの議会主義批判は、(自覚的であったかは不明であるが) 二つの脱政治化に対応して二重の構造を持っているのである。

(a) 自由主義批判と「討論 (Diskussion)」

前節で指摘したように、「第一の脱政治化」は政治的対立があり得るにもかかわらず、あたかもそれが存在しないかのように想定することである。シュミットの言葉遣いを借りれば、「友・敵」という実存的対立の存在可能性を隠蔽しようとすることであると言える。この論点は、『政治的なものの概念』の最終節において特に明確である。政治的なものにおいては、戦争

への現実的可能性を持つ敵の確定および味方との結束が前提とされなければならないにもかかわらず、経済的個人主義を基礎とする自由主義は、「敵」の存在を否認する。「個人にとって、自らが個人的にしたくなくとも生死を賭して闘争しなければならないような敵というものには存在しない」(BP, S. 70)。シュミットによれば、自由主義的思考は、このような「敵」概念を内包する「政治的なもの」を「経済」と「倫理」の両極間に還元することによって、「[「征服する暴力」の領域として滅ぼそうと試みる」(ebd.)。

「闘争という政治的概念は、自由主義的思考において、経済的側面では競争に、別の精神的側面では討論になる。「戦争」や「平和」といった異なる二つの状態の明確な区別に対して、永遠の競争と永遠の討論という動力学 (die Dynamik ewiger Konkurrenz und ewiger Diskussion) が取って代わる。国家は社会になる [...]」(BP, S. 70f, 強調原文)。「国家は社会になる」という文言が示すように、シュミットは自由主義が政治を経済へと変質させてしまっていると主張する。19世紀以降中心領域が経済的・技術的なものとなっている状況を踏まえ、彼は次のように述べる。「今日支配的な経済的・技術的思考は、政治的観念への感受性を喪失した。現代国家は、マックス・ヴェーバーがそこに見出すもの、つまり一つの巨大な企業になってしまったように見える。[...] ここで政治的なものが、経済的なものあるいは技術的・組織的なものの中で消滅すると、他方でそれは文化哲学的・歴史哲学的な決まり文句による永遠の対話の中で (in dem ewigen Gespräch) 溶け消える [...]」(PT, S. 82f.)。この議論は、現代においては新自由主義の台頭に対する批判となりうるが、本稿では深く立ち入らない。

シュミットによる脱政治化批判において目立つのは、「永遠の討論」や「永遠の会話」といったフレーズであるが、これらの語が使用される際には議会主義が念頭に置かれている。『政治神学』の中でシュミットは、コンドルセに代表されるような、「投票という方法によって真理が自ずと明らかになる [...]」(PT, S. 80)であろうと前提する議会制民主主義を否定するべく、ドノソ・コルテスを引き合いに出し、その決断主義的政治観を評価してい

る。「ドノソはそれを、責任を逃れて言論と出版の自由に対して過度に強調された重要性を与え、それによって究極的には決断を下す必要がなくなるような方法であるにすぎないと見做している。[...] 決定的対決や血生臭い戦闘が議会の討議へと変わりうるだろう、そして永遠の討論によってそれらが永遠に停止されるだろうという期待の伴う交渉、静観的な中途半端さが、自由主義の本質なのである」(ebd.)。シュミットにとって、「永遠の討論」そして「永遠の会話」は、「[...] 「敵=味方関係」を相対化し、妥協への道を切り開き、実存的な緊張の中でなされた道徳的決断を無に帰する、という危険をはらむものである」(竹島 [1998] 429 頁)。それゆえ、討論を基礎に置く議会主義によって、政治の場は余儀なく脱政治化されることになる。

しかし、この議論には「友敵理論」という強力な前提が置かれている。議会主義が脱政治化を推進しているという主張に同意できるかどうかは、「敵」を確定しなければならないという決断主義的帰結を導く「友敵理論」の前提を取るか否かに依存する。政治が意見の対立をめぐる討論によっても営まれるという可能性を棄却しない限り、これに賛同することは容易でないだろう。

(b) ロマン主義批判と「会話 (Gespräch)」

前節で指摘したように、「第二の脱政治化」は、ある争点を、「神」や「自然」といった人間には変更不可能であり争うことが徒労であるような領域へと帰属させることによって、政治的対立がもはや起こり得ないものと想定することである。シュミットはこれを明確に脱政治化として批判しているわけではないし、むしろロマン主義に対しては議会主義と関連づけられることになる「永遠の会話」という脱政治化を見出すことによって、集中的に批判を行っている。しかし同時に彼は、「第二の脱政治化」がロマン主義によってなされていることを捉えてもいる。以下では、『政治的ロマン主義』(1919年、第二版1925年)の議論を確認することで、シュミットがロマン主義を問題視する所以を明らかにしたい。

先に、シュミットが政治的ロマン主義をどのように捉えているかを見てお

こう。シュミットはロマン主義者の政治的言説を概観した上で、それらを次のように特徴づけている。「それゆえ、あらゆる政治的ロマン主義の核心は次のようになる。国家は芸術作品であって、歴史的・政治的現実の国家は、ロマン的主体が芸術作品を制作する創造的作業のためのオッカジオであり、詩と小説の、あるいは単なるロマン主義的気分のためのきっかけである」(PR, S. 172f.)。この認識は、いかなる議論から導出されているのだろうか。

シュミットは、ロマン主義における本質とは何かという問題に取り組む上で、対象(客体)の側からアプローチするのではなく、ロマン主義的主体を問わなければならないと主張する。「ロマン的といわれる一連の対象を並べたり、またそこから可能であればロマン的なものの本質を導き出そうと、「ロマン的」客体のリストを作ったりすることは——そのような例もあるのだが——全く不条理なことである。[...] ロマン主義者の独特の態度に注意が払われなければならない、世界への具体的なロマン的關係から出発しなければならない [...]」(PR, S. 5f.)。ノヴァーリス、アダム・ミュラー、フリードリヒ・シュレーゲル、フリードリヒ・フォン・ゲンツなどといったロマン主義者の著作を分析することによって、シュミットは次のようなテーゼを提出する。「ロマン主義は主観化された機会原因論(Occasionalismus)である。つまりロマン的なものにおいて、ロマン主義的主体は、自らのロマン的生産性の発端および機会として、世界を扱う」(PR, S. 23)。

シュミットの理解によれば、機会原因論においては、一定の結果をもたらした要因は機械論的因果関係におけるような「原因(causa)」ではなく、「機会(occasio)」に求められる。「それ[オッカジオと結果の関係]は——オレンジを見たことがモーツァルトにとって「お手をどうぞ」のデュエットを作曲するきっかけとなったように、あらゆる具体的な個々の事物が予測のつかない作用のオッカジオとなりうるのだから——全く計り知れず、いかなる即物性からも逃れており、非合理的であり、空想的なものの関係なのである」(PR, S. 120f.)。ロマン主義者は、あらゆる現実を自らの興味に適うように、いわば「終わりなき小説のきっかけ(Anfang eines unendlichen

Romans)」（PR, S. 121、ノヴァーリスからの引用）となるように解釈する。

このような態度が政治と結びついた時、「政治的ロマン主義」が生まれる。ロマン主義者にとっては、政治的現実も結局は情感を喚び起こすためのオッカジオにすぎない。それゆえ彼らの政治的立場は、「革命がなされている限りにおいて政治的ロマン主義は革命的であり、革命の終結によってそれは保守的になる」（PR, S. 160）といったように、変転を繰り返す。「この政治的内容の不安定性は偶然ではなく、オッカジオネルな態度の帰結であって、ロマン的なものの本質に深く根ざしている。その核心は、受動性（Passivität）である」（ibd.）。この「受動性」を正当化するロジックにおいて、ロマン主義者による「第二の脱政治化」が表れている。彼らの理論において、国家や政府はもはや人為的活動の場ではなくなり、「歴史的発展、あるいは歴史の有機的発展」（PR, S. 168）の表現となる。

政府は「働こうとする」べきではなく、合法則的な生成のリズムの中で揺れ動いているべきである。歴史、発展、究極的には神の摂理が審級なのであり、政府もあらゆる現実的活動をそれに委ねなければならない。こうしてあらゆる能動性は一方から他方へ、つまり個人から政府へ、政府から神へと移され、神において能動性は摂理と合法則性である。[...] 結論は常に、個々の人間の能動性は、「共感をもって共に考える」ことに尽きるということである。政治生活においても結論は同じである。つまり、政治生活において、管轄当局がすることには干渉すべきでない。（PR, S. 168f.）

このようにして、ロマン主義においては、国家や政府を含むあらゆる政治にかかわる能動性が拒絶される。政治の場は、個々人が干渉できる領域ではなく、政治的アクターを超越した何かによって動かされるものとなる。ここに、シュミットは脱政治化の問題を見ていると考えられる。

また、後の「中立化と脱政治化の時代」に見られる中立領域の変遷という

論点を、『政治的ロマン主義』の「結語」の中で先取りしていると思われる箇所を見ておこう。「その〔＝政治的ロマン主義の〕方法は、ここでもまた、抗争的対立が属する領域、つまり政治的なものからより高次のものへの、つまり復古時代においては宗教的なものへの、機会原因論的な逸脱であった。その結果は、絶対的な政府支持、すなわち絶対的受動性であった [...]」(PR, S. 224)。これは、対立の隠蔽という「第一の脱政治化」とは異なる「第二の脱政治化」を表現している。芸術や「美的なもの」、あるいは「自然」的なものの領域へと追いやることによって政治的現実を脱政治化する営為は、究極的には、現状の絶対的追認という「中立的」な見て呉れをとる保守主義の一種に回収されざるを得ない。中立化の「弁証法」を認識するシュミットにとって、政治的対立から逃避できる領域を追求する「第二の脱政治化」に対する批判は、自由主義批判とは異なる理路でなされなければならなかった。しかしそれは『政治的ロマン主義』において——「脱政治化」がシュミットにおいて明確に主題化される以前に——既に遂行されていたのである。

最後に、議会主義とロマン主義がどのように結びつけられているかを簡単に述べておこう。シュミットによれば、議会においてなされる自由主義的な「永遠の討論」は、「永遠の会話 (das ewige Gespräch) というドイツ・ロマン主義者にとって固有な、原初的観念」(PT, S. 69) と一致する (vgl. GLHP, S. 46)。「会話」は、『政治的ロマン主義』において、「[...] 任意の対象を社会的な「言葉遊び」のきっかけにする、ロマン主義的生産性の特殊な呼び方 [...]」(PR, S. 141) といったふうに、既に否定的な評価を与えられている。ここで、シュミットの自由主義批判とロマン主義批判が、〈決断〉を先延ばしにする「会話」を結節点として、議会主義批判において結合されているのである。しかし、クロコウが指摘するように、「両方で「会話」が一定の役割を演じているからというだけで、ロマン主義と自由主義が一緒くたにされる [...]」(Krockow [1990] S. 90) という手法は、かなり強引な論立てであると言わざるを得ない。

しかしここまでの議論を振り返ると、脱政治化には質的に異なる二つが考

えられていた。その二つを批判するだけであれば、シュミットはそれらを自由主義とロマン主義という別個のテーマとして攻撃しても十分であったはずである。しかし議会制度の解体という目的の下では、議会主義が同時に二種の脱政治化を行っているとは結論づける必要があった。その結果、（これは先のクロコウの引用に続く文であるが、）「[...] シュミット自身の諸テーゼから見て、混乱を招くものと見做されざるを得ない」（*ibd.*）と批判されることになるのである。

4. 結語

本稿では、シュミットの脱政治化批判が異なる二種類の脱政治化を扱っていること、さらに両者がそれぞれ自由主義批判とロマン主義批判に対応していることを明らかにした。また、シュミットの議会主義批判が上の二つを「会話」という観念によって接合したところに成り立っていることも確認した。

シュミットの自由主義批判には、決断主義的帰結を招きうる「友敵理論」が前提されているために是非が分かれるところであろうが、より興味深いのはロマン主義批判に関わる脱政治化である。彼の議論は、「自然なもの」である、あるいは「美的なもの」である、という理由から政治化を免れている対象および領域が常に存在しうることを示唆している。

ここから、次のような問いが登場しうる。「自然なもの」に引き付けると、自然科学的言説は政治化されるのか、あるいは政治化される可能性の無い自然科学的領域は存在しうるのか。政治化される領域とされ得ない領域の境界は存在するのか。また「美的なもの」に引き付けると、芸術と政治を分離しようとする言説は、その目的を達成しうるのか。「美的なもの」を含む諸領域の自律化としてのモデルネ把握（*vgl. Habermas [1981b] S. 452ff.*）と脱政治化は、いかなる関係にあるのか。以上の諸問題を今回扱うことはかなわなかったが、今後の考究すべき課題としたい。

[注]

- 1) 本論文は、長尾龍一によれば、「一応 value-free な歴史叙述を装っている」が、内実はカトリシズムに裏打ちされた「終末論的歴史観の一変種」(長尾[2007] 327頁)であるから、その扱いには慎重を要する。宗教的・神学的議論へと踏み込むことは本稿の射程を大きく逸脱するため、本稿ではその歴史認識の妥当性を問うことはせず、シュミットが把握する中立化・脱政治化という現象に専ら注目する。
- 2) シュミットは、スアレス、ベーコン、ガリレイ、ケプラー、デカルト、グロティウス、ホップズ、スピノザ、パスカル、ライブニッツ、ニュートンを例に挙げている(ZNE, S. 82)。
- 3) 和仁陽はこの語を「殺すか殺されるか」という意に解釈している(cf. 和仁[1990] 348頁(註155)、354頁)。
- 4) ただ、この区分はシュミットの「中立化過程」に対する認識から導かれる理論的帰結であるにすぎないことに注意されたい。この二類型は、理論的には明確に異なるが、実際の脱政治化現象をクリアに説明するものではなく、現実には即せばその境界は曖昧であり、判定不可能でさえあり得る。というのも、現実の脱政治化は、様々な要因が複雑に絡み合うことによってなされるからである。

[参考文献]

シュミットの著作を引用する際は、以下のように略記し、括弧内の訳書を参照しつつ、筆者が訳出した。

BP: Schmitt, Carl, „Der Begriff des Politischen“, in: *Der Begriff des Politischen – Text von 1932 mit einem Vorwort und drei Corollarien*, 3. Aufl., Duncker & Humblot, Berlin, 1963, S. 20–78. (権左武志訳『政治的なものの概念』、岩波書店、2022年。また、菅野喜八郎訳「政治的なものの概念(第二版)」『カール・シュミット著作集I』、慈学社出版、2007年、247–311頁。)

GLHP: Schmitt, Carl, *Die Geistesgeschichtliche Lage des heutigen Parlamentarismus*, 8. Aufl., Duncker & Humblot, Berlin, 1996. (樋口陽一訳「現代議会主義の精神的状況」『カール・シュミット著作集I』、慈学社出版、2007年、53–118頁。また、稲葉素之訳『現代議会主義の精神的地位』、みすず書房、1972年。)

PR: Schmitt, Carl, *Politische Romantik*, 2. Aufl., Duncker & Humblot, München und Leipzig, 1925. (大久保和郎訳『政治的ロマン主義』、みすず書房、1997年。)

PT: Schmitt, Carl, *Politische Theologie – Vier Kapitel zur Lehre von der Souveränität*, 2. Aufl., Duncker & Humblot, München und Leipzig, 1934. (長尾龍一訳「政治神学——主権論四章——」『カール・シュミット著作集I』、慈学社出版、2007年、

1-52頁。また、田中浩・原田武雄訳『政治神学』、未来社、1971年。）

ZNE: Schmitt, Carl, *Das Zeitalter der Neutralisierungen und Entpolitischenungen*, in: *Der Begriff des Politischen – Text von 1932 mit einem Vorwort und drei Corollarien*, 3. Aufl., Duncker & Humblot, Berlin, 1963, S. 79-95. (長尾龍一訳「中立化と脱政治化の時代」『カール・シュミット著作集 I』、慈学社出版、2007年、201-215頁。また、田中浩・原田武雄訳「中性化と非政治化の時代」『合法性と正当性』、未来社、1983年、141-169頁。)

Habermas, Jürgen, „Werden wir richtig informiert – Antwort auf vier Fragen“, in: *Kleine Politische Schriften (I-IV)*, 1. Aufl., Suhrkamp, Frankfurt am Main, 1981, S. 245-248. (=1981a)

Habermas, Jürgen, „Die Moderne – ein unvollendetes Projekt“, in: *Kleine Politische Schriften (I-IV)*, 1. Aufl., Suhrkamp, Frankfurt am Main, 1981, S. 444-464. (=1981b)

Hay, Colin, *Why We Hate Politics*, Polity Press, Cambridge, 2007.

Krockow, Christian Graf von, *Die Entscheidung – Eine Untersuchung über Ernst Jünger, Carl Schmitt, Martin Heidegger*, Campus Verlag, Frankfurt am Main, 1990. (高田珠樹訳『決断——ユンガー、シュミット、ハイデガー』、柏書房、1999年。)

Goupy, Marie, “The State of Exception Theory of Carl Schmitt and the Ambivalent Criticism of Liberalism”, *Zeitschrift für Politikwissenschaft*, 28 (4), 2018, pp. 395-408.

Schwab, George, *The Challenge of the Exception: An Introduction to the Political Ideas of Carl Schmitt between 1921 and 1936*, 2nd ed., Greenwood Press, New York, 1989. (服部平治・初宿正典・宮本盛太郎・片山裕訳『例外の挑戦——カール・シュミットの政治思想1921-1936』、みすず書房、1980年。)

竹島博之「カール・シュミットと政治的ロマン主義——モデルネ批判の観点から——」『同志社法学』、50巻、1号、1998年、389-473頁。

長尾龍一「シュミット再読——悪魔との取引?——」『カール・シュミット著作集 I』、慈学社出版、2007年、325-371頁。

ポーブ、クリス・G「脱政治化理論は日本に適用できるのか? ——日本における行政的・社会的・言説的な脱政治化と再政治化——」『現代社会研究科論集：京都女子大学大学院現代社会研究科紀要』、15号、2021年、25-41頁。

和仁陽『教会・公法学・国家——初期カール＝シュミットの公法学』、東京大学出版会、1990年。

(大学院博士前期課程学生)

Carl Schmitt und das Problem der Entpolitisierung

Masahiro NAITO

Carl Schmitt (1888–1985) kritisierte in seinem theoretischen Werk, das die Legitimität der Diktatur begründete, den Parlamentarismus. Eines der verschiedenen vorgebrachten Argumente war die „Entpolitisierung“: ein Phänomen, das in der englischsprachigen Politikwissenschaft in den letzten Jahren behandelt wurde. Schmitt kritisierte die Entpolitisierung vor allem in seinen Angriffen auf den Liberalismus, aber dieser Aufsatz zeigt, dass seine Kritik an der Romantik auch als Kritik an der Entpolitisierung verstanden werden kann.

In seinem kurzen Artikel „Das Zeitalter der Neutralisierung und Entpolitisierung“ sah Schmitt die Verschiebung des „Zentralgebiets“ des europäischen Geistes als einen Prozess der Neutralisierung. Für Schmitt bedeutete Neutralisierung auch Entpolitisierung, wie seine berühmte „Freund-Feind“ Theorie zeigt. Ausgehend von der „Dialektik“ der Neutralisierung, auf die er hinweist, lassen sich zwei Typen der Entpolitisierung ableiten. Die erste besteht darin, die Möglichkeit eines Konflikts zu verbergen, was dem Liberalismus entspricht. Die zweite ist die radikale Verbannung der Möglichkeit eines Konflikts, was der Romantik entspricht. Ich argumentiere in diesem Aufsatz, dass Schmitt die zweite Entpolitisierung bereits in der politischen Romantik kritisiert hatte. Er verknüpfte mit Gewalt die beiden Entpolitisierungen mit dem Begriff des „Gesprächs“ im Parlamentarismus.

Die Kritik an der liberalen Entpolitisierung ist in der Sache geteilt, da sie von seiner Freund-Feind-Theorie ausgeht. Aber die Entpolitisierung von der Romantik wirft weitere interessante Fragen auf, z.B. die nach der Möglichkeit einer Politisierung des naturwissenschaftlichen Diskurses und die nach der Moderne, die als Autonomisierung verschiedener Bereiche, einschließlich des Ästhetischen, verstanden wird.